



多良の雪

石橋誠道

關ヶ原の停車場で下車して南の方へ四里ほぎ進んだ所に多良といふ村がある。この邊にはその昔關ヶ原の合戦の時の落人が餘生を遂げた跡や、またその時の有名な人々の墓がある。昔はこの邊は關ヶ原から伊勢に通ずる街道であつたので、芭蕉翁の歌さへ今に残つてゐるが、今は寒村僻地の部類に屬する極めて淋しい所である。

昔し徳川時代には、高木といふ殿様がこの邊を支配してゐられた。その頃高木家は禮寺であるにも關らず、その奥方は淨土宗の信者であつたので、その奥方が自分の愛子の菩提の爲に建立された淨土宗の寺がある。それは多良村字三ツ里の淨法寺である。此寺に余の知人があるので先年ある要件の爲にその寺を訪問した。

たしか今から六年の昔、昭和元年十二月廿八日であつた。余は學校の勤務を終へて、三河の師跡に歸らんとする途次、廿八日の夕刻に關ヶ原の停車場で下車して、乗合自動車のカタガタに乗つて、南を指して進行した。その日は大變に寒い日で、關ヶ原の停車場に着いた時に既に雲のやうなものが本

ツリボツリと降りかけてゐた。多良に着いて自動車からおりた時にはこれが一層烈しかった。然し其處には淨法寺の信徒が一人、傘と提燈を持つて迎に來て待つてゐて呉れた。

余はその人に導かれて、あやしけな始ての道を四五丁ばかり進んだ時に淨雲寺に着いたが、既にその時はもう薄暗い電燈の光が悲しげに照してゐた。昔し淨法寺の建てられた時は、小じんまりとした立派な寺であつたといふことであるが、今は非常に荒れ果てゐる。實は今度の要件は、その再建の相談である。住寺は悦んで余を迎へた。暫く話を交す間に雲は變じて雪となつた。寒い寒い雪風は遠慮もなくこの荒れ寺の壁の隙、戸の間から押し寄せつた。丸で野中に天幕でも張つて、寒風を防ぐと同じことである。肩から水を流すやうな心地がする、願さへガタガタふるへて來る。その寒い雪の中に信徒總代の人々が、一人、二人、三人と追々に、傘と提燈を手を持ちながら挨拶に來る、いかにも貴い人でも出たかのやうに、大變に丁寧に挨拶をさる、それにはいさゝか恐縮する。然し淳朴な田舎人の談、好々親爺の暖かい話は、全く世界が一變したやうな気分となつて、それからそれと、いろいろ話を續けるうちに、知らず識らずに夜を更かし、時の移るをも知らなかつた。

そしてそれらの人々が辭して家に歸る時には既に四五寸ほぎ雪が積つてゐた。そこで余もまた眠に就いたが、明朝起きて戸をあけて見るに、あたり一面に白皚々、全く銀世界と變化してゐる。積雪凡そ三尺餘り、人馬車乗の音は勿論、郵便配達も通行せぬから、靜寂また靜寂、鳥の聲さへ聞くことは出來ない、たゞたまさかにその靜寂を破るものは、遠方から響く鶏の聲のみであつた。雪はまだ降り

止まぬ、されほご積るか見當がつかない。

朝食を終へて、そろ／＼歸國の準備に取りか、らうとするこ、住寺の言はるゝに、

「この邊は雪が降り出すこ、二日も三日も續くこがあります。今の様子では、こても今日はあかりませぬ。まあ今日一日御逗留を下さいませ。」

「いやそれでは困ります、今日は既に廿九日、迂路迂路してゐるこ元日が來ますから、自動車か車で急いで歸りにやなりませぬ。」

「これだけ雪が降りますこ、自動車も車も通りませぬ、かつ又道が危ないので、歩行も中々險難です、その上雪が降りますのに。」

と言はれて籠城より外に道はなかつた。まあ仕方がない今日一日はこ、度胸をきめて垂れこめてゐるが、さて斯ふなるこ別に談笑の對手もなし、古書珍籍の蓄へもない、新聞さへも配達をせぬ雪の日であるから、いさゝか退屈を感じざるを得ず、一日の日は實に長く／＼感ぜられた。山中曆日なし、雪深くして年を知らずこは言ふものゝ、まだそこまでは悟りきれない所から、明日はたこも雪が降つても、歩いて關ヶ原まで出やうこいふ決心をした。

その夜はまた隣の人やら、信徒總代やら五六人が、來り集つて夜を更かした。そして色々こ談をしでゐる内に、その一人に、

「この雪はこても容易には消けませぬ。たこひ明日天氣があかつて、太陽が光り輝いても、先づ三

日位は車も自動車も通りませぬ。歸國をお急になるなれば、歩んでお越になるより外に致し方もありません。」

こいはれてそれはいよく明日は、たゞこの上雪が降つても、歩んで歸るこゝ、しやう、それには誰れか道案内者が必要だ、案内を頼んで貰ふこゝ、しやうと決心して、任寺に案内者を頼んで貰つた。隣の彦さんが案内するこゝを承諾して呉れた。

あくれば十二月三十日、昨日の雪は名残なう降り止んで、一天朗らかに晴れ渡り、悦ばしい太陽は東の山から、金色の光を白雪の上に投げかけてゐた。隣の彦さんは朝早く仕度をして來た。

「お早うございます、今日は上天氣です、そろそろお出掛はいかゞです?。」

「やあ、ありがたう、それでは今仕度をして、すぐに出掛ますから一寸お待ち下さい。」

それから余は着物の端をまくり、脚絆を着け、草鞋を穿き、荷物はすっかり彦さんに背負つて貰つて、朝の八時頃淨法寺を出た。一昨日から昨日迄、雪は段々に降り積つて、畑も道も解らなかつた。山も谷も區別が出來なかつた。山里の事まで、誰れもまだ道を通つた跡はなかつた。彦さんといふ先導者の導くまゝに、余はその後から付いて行つた。伊吹風の冷たい風は、時々吾々の頬面を烈しく拂つた。けれども吾々は勢よく、道なき道に道をつけて、雪を歩みにじつて前へ前へ勇み進んだ。

暫くにして實に絶景の處に出た。此處は丁度養老の瀧の山の裏手に當る所だ。足下は千尋の谷川である。その谷川を隔て大小の無數の山が、波の如くに連つてゐる。これ等はすっかり雪を被つて、白

鯉々の銀山である。谷はすっかり水さへ枯れて、白い綿花で満ちてある。天は碧瑠璃の色を湛へ、日は黄金の光を添へ、遙か向うに三三五五群をなした山村が、雪の下から顔を出してゐる光景は、實に壯絶快絶である。余はこの景を多良アルプスと言いたいと思つた。この壯快の光景は、今日でなくては見ることは出来ない。しかもまた今暫くの間である。もし一刻も遅かつたなら、その幾分は消け初めたに違ひないと思つた。眞にこの多良の雪こそ、余が生涯の思出であると感じた。斯ふして谷川の縁に沿ふて暫くの間歩み續けた。その風光の勝景はこても紙筆の及ぶ所ではない。

彦さんは足元に氣をつけて黙々として徐々に進んだ。また時には簡単な談を交へつゝ。そして二里半餘り進んで、漸く關ヶ原の停車場に近い時に、幾組かの若い工女の群に逢ふた。そは關ヶ原並に岐阜大垣等の紡績工場の工女達が、楽しいお正月を親しい父母兄弟の家庭で迎ふ可く、お父さんや兄さんに迎へられて歸る群であつた。彼等は娛しさうに晴衣を着て、父兄に澤山の荷物を背負はせて積む雪道を物ともせず、急いで歸るのであつた。

間もなく吾々は關ヶ原に着いた。がその時は既に十二時を過ぎてゐた。今日もまた關ヶ原は時々雪に襲はれた。それが爲に關ヶ原の停車場は、雪除けをするので大混雑であつた。凡そ六十人程の人が交るゝに雪を除けてゐた。余が停車場に着いた時に、人夫が三十人餘り、停車場に休んでゐた。暫くするに親方のやうな男がやつて来て、

「おい、君等も少し出て除けて呉れ給へ。」

「いふこ、人夫の一人が、

「吾々はまだ飯を喰はないんだよ。」

「うッ、飯を喰はない？、飯はさうしたのかな、それでは僕が見て来やう！」

「さいつて急いで外へ出て行つた。暫くするこ又一人が人夫に向つて、

「君等も少し代つて呉れ給へ、みな大分に長いこやつてゐるから。」

「吾々はまだ飯が當らないんだよ。」

「えッ、飯が當らない？、何していやがるんだな？、僕が催促してやるわ。」

「さいつてや、怒氣を含んでまた急いで出て行つた。彼等は飢ゑ寒さで、體全體がふるへてゐた。その時は既に二時に迫つてゐた。」

「や、暫くして先きの男が、湯氣のあがりつ、ある握飯をお櫃に一杯持つて來た。そして人夫らに呼びかけて、

「お、い、みんな此處で一列に並んで呉れ、今握飯を區配から。」

「さいつた。人夫らは直に其處で列を作つた。かの男はまづ一つ宛彼等に與へた。彼等はお茶もなんにもなしで、すぐにそれをバク付いた。が然しその小さい握飯はその時一つ宛しか當らなかつた。勿論彼等の腹はふくれなかつたにきまつてゐる。然しその時に又大聲で呼びかけた。

「君等は早う、一變代つてやつて呉れ、今その内に次の握飯が出来るから。」

ミ。彼等は急いで出て往つた。雪は切きりに降つてゐた。彼等の姿も霞む程に、そして除けたその跡にまただん／＼ミ積つてゐた。

間もなく二時半の上りの汽車が、關ヶ原の驛に着いたから、余は彦さんに別れを告げて、急いでその汽車に飛び乗つた。汽車の乗客は割合に少かつたが、室内はあつすぎるほゞ暖か、つた。余は室内に落着いて、安らかに腰をおろした時に、かの哀れなる人夫らを思ひ出さずにはゐられなかつた。そして彼等がこの大晦日に、雪ミ戦ふその姿は、永く忘るゝことは出来なかつた。